

「男、  
突っ走る！」

スペシヤル

第一稿

作・壽倉  
雅

# 登場人物

木内 雅也（28）	脚本家
木内 孝志（57）	雅也の父
木内 真保（55）	雅也の母
木内 健次郎（24）	雅也の弟
木内 彦藏（87）	雅也の祖父
木内 好乃（82）	雅也の祖母
若村 素子（55）	雅也の叔母、孝志の妹
船倉 篤志（28）	元名古屋芸術専門学校学生
奥村 裕司（28）	元名古屋芸術専門学校学生
山口 拓海（28）	元名古屋芸術専門学校学生
安永 和也（28）	元名古屋芸術専門学校学生
植野 雪奈（28）	元名古屋芸術専門学校学生
中北 猛（32）	雪奈の婚約者
眞榮田 浩平（享年27）	元名古屋芸術専門学校学生／写真
眞榮田 恵（53）	浩平の母
本部 明美（27）	元名古屋カフェ調理専門学校学生
本部 いろは（1）	明美の娘
門野 賢哉（28）	元中央高校生徒
濱口 寧々（28）	元中央高校生徒
志田 悠喜（28）	元中央高校生徒
二色 知永（55）	ニシキエンターテイメント社長
山辺 恒吉（82）	好乃の同級生／造船会社会長
山辺 良太（49）	恒吉の息子／造船会社社長

1 広島・海水浴場（夜）

T『2023年 10月』

雅也がぼんやりと座っている――顔に覇気がなく、無表情で呆然としたままである。

雅也、鞆の中から写真立てを取り出す――雅也と浩平のツーショット。

雅也「眞榮田、俺、そっち行って良いかな……」

2 木内家・事務所（夜・回想）

T『1年前』

雅也がパソコンで仕事をしている――スマホの通知が鳴る。

雅也「（スマホの画面を見て）えッ……」

浩平のSNSアカウントの投稿画面――

――浩平の母・恵（53）の声が流れる。

恵の声（投稿の文章）「浩平の母です。息子が今日の夕方亡くなりました。これまで息子と仲良くしてくださった皆様に、この場

を借りて感謝申し上げます」

雅也、慌ててスマホで電話をかける。

### 3 道（同）

地下鉄の駅から地上に上ってくる雪奈

——スマホの着信が鳴り、出る。

雪奈「もしもし、うちー。どうしたの？」

少しの間。

雪奈「うちー？」

雅也の声「あのさ、ゆきちゃん。落ち着いて

聞いてね」

雪奈「……？」

### 4 木内家・事務所（同）

スマホで電話をしている雅也。

雅也「眞榮田が、亡くなったって……」

雪奈の声「うそ……」

雅也「ゆきちゃんに連絡しようかどうか迷ったんだけど、伝えといたほうが良いと思って」

## 5 道（同）

スマホで電話をしている雪奈。

雪奈「……」

雅也の声「明日、鈴木先生に電話して、お葬式のこととか、確認してみる」

雪奈「うん。詳細分かったら教えて」

雅也の声「分かった。じゃあ、また連絡する」

雪奈「ねえ、うちー」

雅也の声「どうしたの？」

雪奈「ありがとう、連絡してくれて。もし、

あいつが亡くなったこと知らなかったら、

一生後悔するところだった」

## 6 木内家・事務所（同）

スマホで電話をしている雅也。

雅也「良いよ……。ちょっと、心の整理つか

ない……。 （と涙ぐみながら） じゃあね、

おやすみ」

と、電話を切ると、愕然としたように

溜め息をつく。

7 葬儀会場・表（同）

乗用車が入ってきて、運転席から雅也、助手席から雪奈が出てくる。

8 同・ホール（同）

雅也と雪奈が入ってくる――祭壇の真ん中に、大きく浩平の遺影が飾られている。

雅也が呆然と遺影を見つめ、雪奈が泣きながら口を押える。

雅也「眞榮田……」

と、椅子に座っていた恵が気づいて振り返る。

恵「木内さんですか」

雅也「はい」

恵「浩平の母です。ご連絡ありがとうございます。お花台を振り向き」お花まで  
ご用意くださって、息子も喜んでると思い

ます」

雅也「いえ……」

雅也、隣で泣いている雪奈をやりきれないように見つめる。

9      ファミレス・全景（同）

10    同・店内（同）

雅也と雪奈が話している。

雪奈「今でも信じられない、あいつが亡くなつたなんて」

雅也「そうだね……」

雪奈「昨日、あいつが夢に出てきたの。背中をポンと押されてね、それで振り返ったら、もうあいついないんだよ」

雅也「ゆきちゃんも見たんだ」

雪奈「え、うちーも？」

雅也「うん。俺は、学生時代の何気ない日常の夢だった。みんなで食堂に集まってご飯食べたり、中庭で他愛もないおしゃべりし

てる、本当にあの時の生活の一部を見てる  
ような感じの」

雪奈「それって、いつの光景？ 私と浩平が  
まだ付き合ってた頃？」

雅也「んー、どうだろう。けど、二人とも仲  
良さそうだったから、きっとあれは、一年  
生の半ば頃かな」

雪奈「あの時が一番楽しかったなあ。卒業し  
てまだ十年も経ってないのに、懐かしい気  
がする」

雅也「そうだね。大変なこともあったけど、  
今となっては全部良い思い出。おじいさん  
おばあさんになっても、こういう思い出話  
がもつとできると思ったんだけどね……ま  
さか浩平が亡くなるなんて思わなかったし」  
雪奈「あいつが脳腫瘍で療養中だったって話  
はうつちーが前に教えてくれたでしょ。で  
も、いくら何でも早過ぎるよ」

雅也「昨日も言ったけど、正直ゆきちゃんに  
連絡しようかどうか迷った。ゆきちゃんに



は、もう猛さんっていう立派な婚約者がいるわけだし」

雪奈「連絡くれたこと、本当に感謝してる。

今日、お通夜に参列できて良かった」

雅也「そっか……」

雪奈「明日の告別式は行けないから、私の分まで、お見送りお願いね」

雅也「うん。明日はやつすーも来るし、千葉からぐつちが来て、京都からあつぽんが来て、沖縄に行ったおつくーも来てくれるからね。みんなで、最後の見送りしてくるよ」

雪奈「（目を潤ませて）あいつも、みんなに見送られて喜ぶと思う」

雅也「……」

# 11 葬儀会場・全景（翌日・回想）

## 12 同・ホール

浩平の告別式が行われている――それぞれ椅子に座って合掌している雅也、

篤志、裕司、拓海、和也、恵、その他  
弔問客たち。

13 同・表

恵の乗った車と、霊柩車が出発してい  
く——合掌して見送る雅也、篤志、裕  
司、拓海、和也。

雅也、涙が止まらず、ずっと泣いてい  
る——後ろにいた篤志が肩を抱き、

篤志「思いつきり泣けば良しさ。そこまで泣  
いて見送ってもらえて、眞榮田は喜んでる  
だろうよ」

裕司「あいつのことだ。いつまで泣いてるん  
だって思ってるかもしれねえぞ」

拓海「それ、あり得るな」

和也「眞榮田なら言いそうだ」

雅也「（涙を拭きながら）そうだね。あいつ  
っばいね」

14 広島・海水浴場（夜・回想戻り）

浩平との写真立てを見ている雅也。

雅也「眞榮田。俺、いつからおかしくなっちゃったんだろうね……」

雅也、溜息をつくとき、目を瞑る。

15 ニシキエンターテイメント・事務所（回想）

雅也が入ってくる。

雅也「おはようございます」

デスクに座っている社長・二色知永

（55）が不機嫌そうに立ち上がって、

知永「おい木内。何で楽屋が一個しか取れてねえんだよ。さっき、会場からの確認電話があつたけど、どうなつてんだ」

雅也「会場費浮かせるために、イベントキャストの楽屋は一つで良いって言ったのは社長じゃありませんか」

知永「そんなこと私が言うわけないだろ。人のせいにするな」

雅也「でも確かにそうやって……」

知永「（書類で雅也の顔を叩き）いちいち口  
答えるなッ」

雅也の眼鏡が吹き飛ぶ。

知永「お前みたいなガキが私によくそんな生  
意気な口答えができたもんだな」

雅也「（睨めつけて）……」

知永「何だよ、その目は。言っとくけどな、  
お前一人海に沈めることぐらい、私の繋がり  
じゃ何とでもなるからな」

雅也「それは、僕に死ねってことですか？

（と苛立ちながら眼鏡を拾ってデスクに座  
ると）このイベントだって、ほとんど僕が  
準備してるようなもんじゃありませんか。  
社長はプロデューサーって言うておきなが  
ら、会場との打ち合わせやスタッフミート  
イングをドタキャンして全部僕に押し付け  
て。僕はこのイベントの構成作家として関  
わってるんです。社長のパシリになったわ  
けじゃありません」

知永、憤然と雅也が座っている椅子を

蹴る。

知永「それがお前の本心かッ。人が金払って使ってやってるのに、偉そうに構成作家なんて名乗るな。てめえみたいな奴、一人で何もできないだろ」

雅也「（勢いよく立ち上がって）一人で何もできないのは社長も同じでしょ。前回のイベントの赤字補填だって、僕が社長にお金貸したから何とかなったのに。それだってまだ返してもらってないですよ。こんなこと言いたくないですけど、社長のやり方は無謀すぎます。こんなやり方じゃ、常駐スタッフがなくなるのだって無理ありません」

知永「ああ、うるさいッ。興行をする私の気持ちなんか分からないくせに、金払うこっちの身にもなれよ」

雅也「こっちは、ボランティアで働いてるわけじゃないんです。いくら地域を盛り上げるイベントだからって、予算がないなら、

もつと身の丈にあつたものを……」

知永、テーブルの書類をまき散らして、

知永「ああ、いちいちお前の言うことは癪に障るなッ。これ、お前が拾えよ」

雅也「……」

知永「何でお前みたいな奴と一緒に仕事しなくちやいけないんだろ。邪魔でしょうがねえわ。首くくってくれねえかな。お前の顔なんか見たくもない」

雅也「……」

知永「そういえば、お前去年、友達亡くしたって言ったよな。何でお前が死ななかったんだろうな」

雅也「……！」

知永「頼むから消えてくれねえか」

雅也、諦めたように荷物をまとめようとする。

知永「ちよつと待て。スマホとノートパソコンは置いてけ」

雅也「は……？」

知永「スマホもパソコンも、このイベントの情報や連絡先が入ってる。持ち出したら、情報流出でお前を訴えるからな」

雅也「スマホもパソコンも、自分の名義で自分で買ったものです。社長の勝手にはなりません」

知永「いいから出て行けよ」

と、無理やり雅也の腕をつかむ。

16 同・表（同）

知永に突き飛ばされて、雅也が倒れこむ。

知永「その汚ねえ顔、二度と私に見せるな。死ねッ。友達の後でも追ったら良いだろ。とつとと消えろ」

と、ドアを閉める——呆然と寝転んだままの雅也。

17 広島・海水浴場（夜・回想戻り）

目を瞑った雅也から涙がこぼれる——

雅也、目を開けると、鞆に写真立てを  
しまう。そして中から市販のカプセル  
薬とカップ酒を取り出す。

箱からカプセルを全部取り出し、カッ  
プ酒のふたを開けると、同時に口の中  
に含む。

そのまま海へ向かおうとすると、途中  
でフラフラとし始め、その場に倒れこ  
む。

18 木内家・表く玄関（翌日）

一台の乗用車が勢いよく入ってきて、  
助手席から雪奈、運転席から雪奈の婚  
約者・中北猛（32）が降りてくる。  
雪奈、インターホンを鳴らす——中か  
ら真保の声がする。

真保の声「はい？」

雪奈「あの、私、うっちー……じゃない木内  
君と同じ専門学校だった植野と言います。  
木内君いますか？」



と、勢いよくドアが開き、真保が出てくる。

真保「息子のこと、何か知ってるんですか？」

## 19 同・事務所

真保、孝志、雪奈、猛が向き合って話している――真保、白い封筒を雪奈と猛に見せる。

真保「これが、昨日普通郵便で届いたんです」

雪奈「普通郵便？」

真保「もしかしたら、もうあの子……」

雪奈「え……」

孝志「内容が、俺たち家族にあてた遺書だったんです」

雪奈「遺書って……」

真保「どこに行ったのか、連絡もつかなくて……」

雪奈「実は、先週のことなんですけど、仕事のことで悩んでるみたいだったので、ご飯に誘ったんです。でも、やっぱり仕事が終

わりそうにないからって結局会えなくて」

孝志「ここ最近、夜中に帰ってくるのが続いてたんです。泊まりがけの時もあって、息子と顔を合わせることが、しばらくありませんでした」

猛「あの、連絡が取れないってことだったんですけど、SNSのことは何かご存じないでしょうか？」

真保「SNS……？」

雪奈「私、各種SNSは全部うちーと繋がってるんです。でも、三日前に突然全部のアカウントが削除されてたんです。京都にいる、もう一人の専門学校の友達がそれに気づいてくれて、それで私も、もしかしたらうちーに何かあったんじゃないかと思っで、それで今日駆けつけたんです」

真保「そうでしたか……」

猛「遺書ということでしたけど、警察からは何か連絡ありましたか？」

孝志「いや、今のところは……。三日前に仕

事で名古屋の方に行くから駅まで送ってほしいと頼まれて、それが最後になったんですが、おそらくあれも、どこかへ行くための作り話だったんだと思います。この手紙が届いてからすぐ、警察には搜索願を出しましたから、何かあったらすぐに連絡が来るとは思いますが」

雪奈「うっちー……」

猛「（雪奈を気に掛けながら）連絡がないということは、まだどこかで生きてる可能性だってあると思いますから、お気を落とさずに」

孝志「ありがとうございます」

真保「人の目につかないところで、死んでたりすることもある」

孝志「おい（とたしなめる）」

真保「だって、じゃあこの三日間、どこで何してるって言うの」

孝志「……」

真保「（ハッと我に返り）あ、失礼しました」

雪奈「いえ……。うちーが無事であることは、私も祈ってますから」

真保「ありがとうございます……」

20 街を走る乗用車

21 その車の中

運転席に猛、助手席に元気がない様子の雪奈。

猛「大丈夫？」

雪奈「うちー、どこ行っちゃったんだろ……」

……頼むから無事でいて……」

猛「あつぽんに連絡したら？」

雪奈「あ、そうだった……」

と、スマホを取り出して、電話をかける。

22 京都・篤志のアパート

篤志がスマホで電話をしている。

篤志「え、うちーが……」

雪奈の声「警察には搜索願出したんだって」

篤志「行方不明ってことか……」

雪奈の声「とにかく無事でいてほしい」

篤志「なあ、確か仕事のことで悩んでたけど、もしかしたら、眞榮田のこともあるんじゃないのか。来月で、もう一年経つだろ」

雪奈の声「うん。私もそれが気になった。でもだからって、そんな変な気起こさなくても良いのに……」

篤志「冷静な判断ができないぐらい、うつち  
ー、精神状態がおかしくなってたんじゃないのかな。SNSのアカウントを消したのも、きっとこれまでのものを全て消すって意味合いがあるのかも」

## 23 乗用車の車内

雪奈がスマホで電話をしている。

雪奈「やめてよ、そんなこと言うの」

篤志の声「ごめん。でもさ、仕事の宣伝も兼ねてSNSでずっと情報発信してきたうっ

ちーがアカウントを消すってことは、相当な覚悟だったんじゃないのかな。仕事も全部放り出すことでもあるわけだし」

雪奈「それはそうだけど……眞榮田が亡くな  
って、これでうちーにまでもしものこと  
があつたら、私どうして良いか分かんない」

## 24 京都・篤志のアパート

篤志がスマホで電話をしている。

篤志「今はとにかく、うちーの無事を祈る  
しかないな。俺たちにはそれぐらいのこと  
しかできない。うちーの家まで様子見に  
行ってくれてありがと。じゃあ、また」

と、電話を切ると、本棚に目をやる――  
『うちーコーナー』の紙が貼って  
あり、雅也が作ったパンフレットやフ  
リーペーパーが入っている。

篤志「うちー、どこにいるんだよ……」

と、スマホを開き、飲み会の帰りに自  
撮りをした雅也と雪奈と篤志が映る写

真を見つめる。

25 広島・海水浴場

一台の軽バンが停まり、運転席から釣りの装いをした山辺良太（49）が降りてくる――石壁を上り、周囲を見渡すと、何かの異変に気付く。その視線の先に、倒れている雅也の姿。

良太「人か……？」

と、釣り竿を置くと、走って雅也の元へ行く。

良太「（雅也を抱えて）おいッ、しっかりしろッ、おいッ……」

26 同・山辺造船株式会社・全景

27 同・同・事務所

ソファ―で眠っている雅也が、ゆっくりと目を覚まし、体を起こす――デスクで仕事をしていた良太が気づいて、

良太「おお、気がついたか」

雅也「ここは……？」

良太「うちの会社だ。山辺造船って言うんじゃないけど、まあ、よそから来たもんは分かんじやろ」

雅也「……」

良太「海水浴場で倒れとったけえ、ここまで運んできたんじゃない。近くの診療所の先生に診てもらって、胃洗浄したんじゃない。もっと見つけるのが遅かったら命に関わることにもなつとったけえ、良かったわ」

雅也「……」

良太「何があったか知らんが、自殺考えるなんて、よくよくのことがあったんじゃない。せやけど、そんな姿見たら、好乃さん悲しむわな」

雅也「祖母を……知ってるんですか？」

良太「身元が分かるものないか、調べさせてもらうんじゃない。そしたら財布に免許証入ってて、住所が愛知じゃったつけ、しかも



名字が木内だったから、うちの親父の小学校時代からの同級生の好乃さんとの孫やないかと思つてな。今、親父が好乃さんを迎えに行つとる」

雅也「……」

と、事務所のドアが開き、良太の父・

恒吉（82）と好乃が入ってくる。

恒吉「（雅也を見て）おお、ようやく目覚めたか」

好乃「雅……」

雅也「おばあちゃん……」

好乃「あんた、何があつたんや」

恒吉「好乃ちゃん、今はそう聞かんほうがええわ。ゆつくりと休ませてやらんと」

好乃「そうやね……。 （と雅也に）孝志に連絡しといた。あんた、死ぬつもりやったんやつてね」

雅也「……」

好乃「しばらく、うちにおつたらええわ」

雅也「……」

好乃「ツネちゃん、良太君。ほんまにありがとう。うちの孫見つけてくれて」

良太「いやいや。今日は仕事が休みやったけえ、いつもみたいに釣りに行こう思うたら、こうなったんじゃ。何はともあれ、この子の命が助かったんじゃけ、良かったわ」

恒吉「体が思うようになるまで、もう少しここで休んでいったらええわ。まあ夕方には帰れるじゃろ」

雅也「……」

好乃「迷惑にならんかね」

恒吉「気にすることあれへんって。人助けしたと思えば、何とも思わんけえ」

好乃「……」

雅也「……」

28 同・木内家・全景（夜）

29 同・同・台所

彦蔵がおでんの支度をしている――テ

ーブルに置いてある鍋敷きの上に、おでんの鍋を乗せる。

彦蔵「（居間に向かって）おい、飯だ」

と、好乃が入ってくる。

好乃「はいはい、ありがと」

彦蔵「雅、飯食えるんか？」

好乃「ツネちゃんの会社で聞いたけど、あの子、二日も海におって、その間、何も食べてへんって」

彦蔵「なら少しでも食わしたほうが良いじゃろ」

好乃「そうじゃね。呼んでくるわ」

30 同・同・居間

雅也が呆然としたまま、写真立てを見つめている。

雅也「眞榮田、俺、死ねんかったわ……」

と、好乃が入ってくると、

好乃「雅、晩御飯じゃ。今日はおじいさんが、おでんこさえてくれたわ」

雅也「そう……」

好乃「少しでも食べんと、ようならんで」

雅也「（渋々）うん……」

31 同・同・台所

雅也、彦蔵、好乃がおでんを食べている。

好乃「よう染みてるな」

彦蔵「（耳を立てて）え？」

好乃「（声を強めて）よう染みてるなって言

うたんじゃ」

彦蔵「当たり前じゃ、昼から仕込んだんじや

けえ」

雅也「……」

好乃「（雅也に）無理に食べんでもええから、

少しずつ食べたらよろしいわ」

雅也「うん……」

32 木内家・玄関（夜）

スーツケースを持った孝志が靴を履い

ている——見送りに来ている真保と健

次郎。

孝志「じゃあ、向こう着いたらまた連絡する」

真保「お義父さんとお義母さんによろしく」

健次郎「兄貴、戻って来るのか？」

孝志「分らん。一旦は、あいつの話を聞いてみないと」

真保「あの手紙に書いてあることが本当だとしたら、二色っていう女社長、許せない」

健次郎「兄貴、大分電話するときも疲れてた顔してたからな」

孝志「専門学校卒業してから、ずっと突っ走ってきたんだ。ここで少し休んでも良いんじゃないかね」

真保「そうね」

孝志「じゃあ、行ってくる」

真保・健次郎「行ってらっしゃい」

スーツケース持って出ていく孝志。

真保と健次郎が戻ってくる。

健次郎「兄貴、無事で良かったな」

真保「けど、おばあちゃんの話じゃ、おばあちゃんの同級生の息子さんって方が、海で倒れてる雅を見つけたらしいから、本当に死ぬ気だったんだろうね。でも……（と涙ぐんで）生きてて良かった」

健次郎「兄貴には、早く元気になってもらわないと」

真保「仕事のこと、どうするんだろ」

健次郎「スマホとパソコンがないと、何もできないもんな」

真保「スマホもパソコンも返してもらえないなんて、二色って奴、一体何考えてるんだろ」

健次郎「『ニシキエンターテイメント』って会社、調べてみたよ。（とスマホを見ながら）主に舞台公演とか音楽イベントを企画してるイベント会社らしい。この代表の二色って女は、タレントや女優もやってたか

ら、自分でプロデューサーをしながらイベントにも出演してる。兄貴はこのイベントを手伝ってたんだな。しかも、実質ボランティアで」

真保「手紙に、お金貸したり、経費の精算もされてないって書いてあったけど、そんなんでよく会社できたわね。内容的に、雅が受けたのはパワハラでしょ。訴えられないかな」

健次郎「モラハラや人権侵害も入ってるだろ。兄貴のことだけじゃない、俺たち家族や友達のことだって暴言吐いたって手紙には書いてあった。兄貴のことだ、自分のことは何を言われても家族や友達のことを悪く言われたことが許せなかったんだろ」

真保「確か、明日イベントの本番があったんでしょ。それを投げ出してでも、死ぬことを選ぼうとしたなんて、相当追い詰められてたんだね。私、何にも気づいてあげられなかった……」

健次郎「手伝いのスタッフはいるみたいだけ  
ど、常駐でイベントの全てを把握してるの  
は兄貴だけだったからな。スタッフの間じ  
ゃ、バタバタだろうな」

真保「人の息子をコケにした罰よ。雅に酷い  
ことしたから罰が当たったの。バタバタし  
て、苦しんだら良いのよ。雅だって散々辛  
い思いしてきたんだから。プロデューサー  
だかタレントだか知らないけど、私は絶対  
にあの女を許さないから」

健次郎「けど、スマホがないと、他の仕事先  
と連絡が取れなくなつて、今やつてる他の  
仕事できなくなるだろうな……」

真保「何もかも捨てるつもり、というか捨て  
ざるを得なかったんだろうけど、今の雅に  
は、仕事を全て辞めさせて、心を治すこと  
を優先したほうが良いわね」

健次郎「どんな仕事だろうが、兄貴が元気に  
生きてさえいてくれたら、それで良いよ」  
真保「そうね……」



34 広島 の 道（朝）

雅也と好乃が歩いている。

好乃「朝の散歩もええじゃろ。ばあちゃん、免許返納してから、外に出ることが少なくなっただけえ、こうして毎朝散歩しよるんじや。運動にもなるし、気分転換にもなるけえの」

雅也「うん……」

35 広島・木内家・表

雅也と好乃が戻ってくる——孝志の車が停まっている。

好乃「ああ、孝志着いたんじやな」

孝志が運転席から降りてくる。

孝志「雅……」

雅也「父さん……」

雅也、孝志の元へ走って、強く抱き着く。

孝志「生きてて良かった」

雅也「俺、死ねなかった……」

孝志「バカッ……死ぬやつがあるか」

雅也も孝志も、目に涙が浮かんでいる

——見守るようにその様子を見ている

好乃。

36 同・同・居間

雅也、孝志、好乃が話している。

孝志「しばらく、雅こっちで預かってもらえんか？」

好乃「私は構わんで。ここにおって、少しでも雅が元気になるんやったら」

雅也「……」

孝志「こっちのことは気にしなくて良い。二色って女のこと、何とかこっちで話進めるようにする。お前は何も考えず、ゆっくり休め」

雅也「うん……」

好乃「雅、これはあんたの人生なんやから、マイペースでいったらええんやで」

雅也「……」

好乃「今日であんたは一回死んだ。今日から生まれ変わったつもりで、人生やり直すんや」

雅也「おばあちゃん……」

と、台所から彦蔵がやってくると、

彦蔵「昼飯、昨日のおでんの残りでええか？」

好乃「大将に任せます」

孝志「わしも食うぞ」

彦蔵「お前も食うんか」

孝志「当たり前やないか」

彦蔵「せやったら、具材追加せなあかんな。

こいつようけ食いおるで」

孝志「失礼な」

好乃「あんた、少しは痩せたんか」

孝志「これでも大分落としたほうやわ」

好乃「ほとんど変わってへんやないか」

彦蔵「好き勝手するのはええけど、真保さん悲しませたらあかんで。ええ娘さんに嫁に来てもらうたんじゃけ、大事にせんと」

好乃「（小声で）誰が言いよるんじや」

彦蔵「とりあえず、卵とちくわ増やすかの

（と台所へ戻っていく）」

37 同・同・台所

雅也、孝志、好乃、彦蔵がおでんを食  
べている。

雅也（N）「父にとっては八年ぶりの実家帰  
省であつたことから、二日間に渡つて地元  
に残つた同級生や知人に顔を見せた後、愛  
知に戻っていきました。そして僕は、三週  
間後に再び父が迎えに来るまでの間、祖父  
母の元で静養することになったのでした」

38 同・全景（数日後）

39 同・同・居間

雅也がぼんやりとテレビを見ている――  
――台所から好乃が顔を出すと、  
好乃「雅、少し早いけど、三時のおやつにし

ようか」

雅「うん」

40 同・同・台所

向き合うように座った雅也と好乃が、  
コーヒーを飲みながらカステラをつま  
んでいる。

好乃「なあ雅」

雅也「……？」

好乃「こんなこと聞くのは何じゃけど、どう  
してこっちで死のうと思うたんじゃ」

雅也「何でだろう……でも、気がついたら新  
幹線に乗って、広島に来てた。生まれ育っ  
たのは愛知だけどさ、何と言うか、この島  
がさ、原風景みたいに思えてね。それに、  
あの海水浴場の隣には、昔亡くなったひい  
おばあちゃんの家があつたでしょ。子ども  
の時、親戚でひいおばあちゃんの家に集ま  
って、海水浴場で遊んだじゃん。思い出の  
場所で死ねたらと思ったんだけど、もしか

したら、ひいおばあちゃんが止めてくれたのかな。まだ死ぬのは早いって」

好乃「きつとそうじゃ。娘である私がまだ生きてるのに、ひ孫が先にこられたらびつくりするじゃろ。よう止めてくれたって、感謝せなあかんわ」

雅也「これから、どうしたら良いのか、まだ分かんないんだけどさ……」

好乃「無理に決めんでもええわ。言うたじゃろ、マイペースで行ったらええんやから」

雅也「うん……」

雅也（N）「祖母にそう慰められたものの、僕は結局自分でどうして良いのか分からないまま、時折やはり死を選ぶことを考えることも続いていました。そして三週間後、父の迎えで再び愛知に帰った僕でしたが……」

41 木内家・居間（三週間後）

一升瓶の日本酒をグラスに注いで、一

気飲みをする雅也——傍らの健次郎が  
難しい顔をしている。

健次郎「兄貴、昼間っからそんなに飲むこと  
ないだろ」

雅也「うるさいッ。俺みたいなやつが生きて  
たって、何にもならないんだ。こうしてい  
るだけで、俺は家族のお荷物になって、迷  
惑をかける。あの時、死んどけば良かった  
んだ」

健次郎「……」

雅也、立ち上がって台所へ行くと、冷  
蔵庫から缶ビールを取り出して、ふた  
をあけて飲み始める。

健次郎「兄貴……」

と、真保が帰宅する。

真保「ただいま。ごめん、ちよっと仕事長引  
いちやって」

健次郎「（真保に）あれ見てみろよ」

真保、台所を見ると、缶ビールを飲ん  
だ雅也がふらついている。

真保「どうしたの？」

健次郎「昼間から酒飲みまくってるんだよ」

真保「え？」

雅也「飲まないとやってられないこともあるんだよ。ああ、どうして俺みたいな奴が生まれてきちゃったんだろうな。他に死ぬる方法ないかな」

真保「……」

健次郎「……」

雅也「楽に死ぬる方法調べようかな……（と嘲笑うように）あ、そっか、スマホもパソコンもないんだった」

真保「……」

と、バイクの音が外から聞こえ、イン  
ターホンが鳴る。

真保「私出てくるわ」

と、出ていく——不安そうに雅也の様  
子を伺っている健次郎。

真保、封筒を持ったまま憤然と戻って  
くると、



真保「二色の代理人弁護士から、通知書が来たわ」

健次郎「え？」

真保「見てよ、この内容ッ」

健次郎「（書類を見て）損害賠償を検討しているところですって……兄貴を追い出したのは自分だろ。何で被害者面してるんだよ。（と文書を見ながら）『引き継ぎが行えず、イベント業務において多大な損害を被った』って、こんなのふざけてるわ」

真保「父さんが帰ったら相談しよ」

健次郎「うん」

雅也「二色はそういう女なんだよ。自分のしたことを棚に上げて、自分だけが被害者面するんだよ。さすが女優だよ、可哀想な自分を演じるのが上手いんだから」

真保「……」

健次郎「……」

雅也「てか、俺に死ねって言ったのに、その相手に損害賠償させるなんて、どう思う」

考してるだろうね。死んだらこれまでのギ  
ヤラや立替経費を払わずに済むからラッキ  
ーと思っただろうし、生きてたら今度は損  
害賠償で更に金を取ろうとする。あの女が  
ここまで拝金主義者だとは思わなかった。  
本当、とんでもない女だよ」

と、冷蔵庫から缶チューハイを取り出  
し、飲み始める。

真保「（雅也を止めて）もうそれぐらいにし  
ときなさい」

雅也「あの女のことを考えると、頭がおかし  
くなりそうなんだよ。酒飲まないと、次は  
俺、何するか分かんない」

真保「……」

健次郎「……」

足がふらつきながらも、缶チューハイ  
を飲み続けている雅也。

42 広島・木内家・台所（夜）

好乃と彦蔵が夕飯を食べている。

好乃「雅、大丈夫じゃるか」

彦蔵「……」

好乃「もう少し、こっちでゆつくりさせても  
良かったかもしれへんなあ」

彦蔵「雅なら大丈夫じゃ」

好乃「え……？」

彦蔵「あいつはわしの孫で、孝志の息子じゃ。  
ひのえうまの孝志の息子が、いのしし年の  
雅なんじゃけ、ちゃんとやってくれるじゃ  
ろ」

好乃「（小声で）そんなんやったら、誰も苦  
労なんかせえへんわ」

ブツブツ文句を言っただまの好乃。

#### 43 京都・篤志のアパート（朝）

篤志が出かける支度をしている――ス

マホの着信が鳴り、出る。

篤志「（電話に）もしもし。ああ、おはよう、  
ゆきちゃん。ああ、今から仕事行くところ。  
いや、俺のほうにも何の連絡もないよ。そ

うだよな、もう一ヶ月ぐらいになるか、うちーと連絡つかなくなってから。……そっか、まあ今日ゆきちゃんがまた行ってみて、何か進展があれば良いけど。うん、よろしく。じゃあまた。（と電話を切ると）うちー、どうしちゃったんだよ……」

44 木内家・居間（夜）

真保が台所で食器洗いをしている――  
雅也が覇気もなくテレビを見ている。

と、ドアが開き、出かける支度をした  
健次郎が入ってくる。

健次郎「じゃあ、夜勤行ってくるわ」

真保「いってらっしゃい」

雅也「（元気がなく）いってらっしゃい」

健次郎「行ってきます（と出ていく）」

雅也、気だるそうにリモコンを持って  
チャンネルを変えると、玄関から健次郎の声が聞こえる。

健次郎の声「兄貴。植野さんって人が来てる

ぞ」

雅也「ゆきちゃん……」

真保「……」

45 同・玄関

雅也がやってくると、ためらいながらもドアを開ける——雪奈と猛が立っている。

雅也「ゆきちゃん……」

雪奈、その場に泣き崩れる。

雅也「……」

雪奈「良かった……無事で……」

雅也、しゃがみこんで、

雅也「ごめん、ゆきちゃん……」

雪奈「もうバカッ……。私が、どれだけ心配したと思ってるのッ……」

雅也「ごめん……」

猛「いやあ、本当に無事で良かった」

雅也「猛さんにも、ご心配おかけしまして……」

46 同・事務所

雅也、雪奈と猛が向き合って話している。

雪奈「そんなことになってたんだ……」

雅也「連絡しようと思っても、スマホが手元  
にないでしょ。だから、連絡したくてもで  
きなかったの。俺が広島にいた時、父親か  
らゆきちゃんが家に来たことを聞かされて  
たから、こっちに戻ってきたら、ゆきちゃ  
んにはまず連絡しなきゃと思ってた。でも  
スマホがないとさ、仕事どころか何もでき  
ないでしょ。すっかり生きる希望もやる気  
も失って……（と苦笑して）まあ、落ちぶ  
れたってやつよ」

雪奈「私、眞榮田のことがあったから、後を  
追うんじゃないかと思ってたけど、まさか  
本当にそんな気でいたなんて……」

雅也「遺書も書いたぐらいだからね……」

雪奈「うっちー……そんなの書くもんじゃな

いよ」

雅也「分かってるよ。でも、例のプロデューサーからいろいろ言われたら、精神崩壊もするしさ」

雪奈「……」

雅也「言葉を武器に商売してた俺が、凶器になった言葉に刺されたようなものだよ」

雪奈「結構、言われたんでしょ？ SNSの投稿にも、人格否定されたって書いてあったじゃん」

雅也「うん……。結構言われた」

47 ニシキエンターテイメント・事務所（回想）

知永が雅也に怒鳴っている（雅也の視点になるカメラ目線）。以下、知永のセリフのカットバック。

知永「お前ほど使えない作家は初めてだわ」

× × ×

知永「こんな出来損ないな人間を産んだお前

の親の顔が見てみたいわ。まあ、『この親にしてこの子』って言葉の通り、お前の親も大した人間じゃないんだろうな」

× × ×

知永「お前が関わってるイベントなのに、友達一人も誘えないってどうなってるんだよ。見に来てくれないってことは、お前との関係性はその程度の大した友達じゃないってことだぞ。仲良しごっこならやめちまえッ」

× × ×

知永「謝罪だけだったら小学生でもできるぞ。小学校からやり直せッ」

× × ×

知永「お前は、障がい者かよ」

× × ×

知永「日本語わかってる？」

× × ×

知永「お前の目が気に入らない。顔も気持ち悪いな」

× × ×



知永「誰もお前のことなんて信用してねえよ」

×

×

×

知永「お前とかかかわるとロクなことねえわ。

お前が関わるようになってから、このイベントの売り上げが落ちたんだよ。お前は貧乏神だよ。この貧乏神が。とっとと失せろ」

48 木内家・事務所（回想戻り）

雅也「……」

猛「酷い話だね……それじゃあ、うちーが  
そういう精神状態になるのも無理ないよ」

雪奈「……」

雅也「百歩譲って、自分のことは悪く言われ  
ても耐えられたかもしれない。けど、家族  
や友達のことまで悪く言われて、限界だっ  
た。死のうと思ったのは、眞榮田のことを  
言われたから」

雪奈「え……？」

雅也「あいつが亡くなった時、ちょうど前回  
のイベントの本番の直前だったんだよ。だ

から、お通夜と葬式に出るために、こっちの事情を話したから、少なからず俺が同級生を病気で亡くしたことは知ってたの」

雪奈「それで、あの女は何て言ったの？」

雅也「（大きな溜息をついて）えっとね……」

×

×

×

〈フラッシュ〉

ニシキエンターテイメントの事務所の

雅也と知永。（シーン15 より）

知永「何でお前みたいな奴と一緒に仕事しなくちやいけないんだろ。邪魔でしょうがねえわ。首くくってくれねえかな。お前の顔なんか見たくもない」

雅也「……」

知永「そういえば、お前去年、友達亡くしたって言ったよな。何でお前が死ななかったんだろうな」

×

×

×

雅也「……」

雪奈「許せない……そんなこと言ってうっち

ーを追いつめたなんて」

猛「よく無事だったね、本当に……」

雅也「ゆきちゃんにだから言うけど、そのプロデューサーから、損害賠償を検討してるっていう通知書が、この間届いたの」

雪奈「だって、うちのーのほうに損害賠償請求しても良い立場じゃん」

雅也「まあそれはそうなんだけど、向こうとしては俺がいなくなったことでイベント運営ができなくなったから、それに対する損害賠償らしい」

雪奈「そんな……」

雅也「俺が死んでたら、きっとそういうことはしないとは思っただけだよ」

猛「もしかして、それガスライティングじゃないかな」

雪奈「ガスライティング……？」

雅也「……？」

猛「一種の精神的洗脳みたいな感じでね、自分に逆らえないようにさせて、それで精神

的に相手を追い詰めてく心理攻撃だよ。相手を破滅させることを目的にしてるらしい」

雪奈「まあ、ある意味ではうちーを破滅させたようなものか」

猛「職場だったら、それこそ相手を退職に追いやったり、最悪の場合、相手が自殺することもある。正直言い方は悪いけど、間接的に自殺させようとしてるってことだね」

雪奈「まんま、今のうちーじゃん」

猛「うちーの話聞いてて、ふとそう思ったんだよ」

雅也「そっか……確かに、向こうからしたら、俺に死んでもらった方が得することが多い」

雪奈「どういうこと？」

雅也「俺、あのプロデューサーから一銭もギヤラ払ってもらってないし、ポスターやチラシとかの制作費とか、立て替えた印刷費もね。それに、イベントが赤字になったから、俺プロデューサーに二十万円貸したの。それも返済されてない」

雪奈「お金貸した相手に、そんな攻撃するな  
て、どういうつもりなんだろう」

雅也「そういえば、急に当たりが強くなった  
り、攻撃し始めたのは、俺がその二十万円  
を貸してからだ……」

猛「多分、それがガスライティングするきつ  
かけになったんだと思うよ」

雅也「……？」

猛「そのプロデューサーからしたら、自分が  
恥をかくのを承知で、うちーからお金借  
りたわけでしょ。その行動が屈辱になって、  
その恨みをうちーにぶつけたんじゃない  
かな」

雅也「そういえば、『こっちはお前に下げた  
くない頭下げて金借りてんだッ』って怒鳴  
られたこともありました」

猛「ギャラとか制作費とか、プロデューサー  
が本来うちーに払うべきお金って、結構  
な金額になるんじゃない？」

雅也「ほぼ三桁に行くぐらいです」

雪奈「そんなにッ……？」

猛「それだけの金額をうちー一人に払うわけでしょ。でも、もしここでうちーが死んだら、そのお金は払わずに済む。ガスライティングをする目的は、そこだったんだよ」

雅也「なるほど……」

雪奈「お金払いたくないから、うちーを精神的に追い詰めて自殺させようなんて、人間のすることじゃないわ……」

雅也「……」

雪奈「そっちのことは、まだ解決できないかもしれないけどさ、せめて何かうちーと連絡できる手段があれば良いんだけどね」

雅也「スマホはさ、パスワードを教えるように言われてたんだよね。だから、それでアカウントを削除したんじゃないかな。まさかそこまでするとは思わなかったけど」

雪奈「仕事関係者から何の連絡がないのも、きつとうっちーのスマホからいろいろ連絡

したんだろうね」

雅也「この間、母親から聞いたんだけど、

『スリジェネ』の活動も、もう終わったんだって」

雪奈「『スリジェネ』って、うちーがメンバーやってた、あのパフォーマンスグループだよ。舞台とかやってた」

雅也「うん。俺、そこで広報担当常任理事兼事務局長っていうのをやってたんだけど、去年から総務会計担当の常任理事も兼任してたんだよ。会計担当だった俺が消息不明になったら、何の引継ぎもできないからね。そこで一緒だった子どもたちは、きっと俺のこと恨んでると思う。俺のせいで、せっかく活動してたグループが解散することになったんだから」

雪奈「あんなに、楽しくやってたのにね。直接は見れなかったけど、YouTubeチャンネルは登録してたから、私いつも見てたの」

雅也「全部失うと、こんなにも辛いんだなと

思ってたさ。不本意ながらも、自分に原因があるってなると尚更……」

雪奈「辛いかもしれないけど、リセットするしかないよ。SNSもアカウントが全部消えちゃったのなら、新しく作り直せば良いし」

雅也「スマホもパソコンもないんじゃ、どうしようもないけど……」

猛「タブレットとか、持ってないの？」

雅也「タブレット……？ あ……」

と、デスクの引き出しの中から、タブレットと充電器を取り出すと、繋げて

電源を入れる。

雅也「あ、良かった。このタブレット、まだ使える」

雪奈「使ってたかったの？」

雅也「仕事で使うかと思って、中古で買ったんだよ。でも、ほとんど使うことがなくてさ。（と起動したタブレットの画面を見て）SNSのアプリはダウンロードしてあ



るから、これでもう一度アカウント作り直せば良いかな」

雪奈「そうだよ。今回のことで、うちーがいなくなったことを知ってるのは、専門学校のメンツだと、私と京都にいるあつぽんだけ。だから、アカウントが凍結したから作り直したってみんなに言っとけば、多分大丈夫だと思う。LINEも同じようにしとけば大丈夫でしょ」

雅也「ありがと、そうしてみる。まあ、このタブレットはネット環境があるところじゃないと使えないから、ちよつと不便かもしれないけど」

猛「損害賠償の通知送ってくるより、スマホとかパソコンを返却してほしいよね」

雪奈「何で返却しようとしないんだろ」

雅也「メールのやり取りとか企業秘密になる情報の流出を避けるため、みたいなそれっぽい理由を並べそう。あのプロデューサー、そういう屁理屈並べるのだけは上手いから」

猛「それに、ガスライティング、あるいは、  
うちーに攻撃したパワハラみたいな証拠  
が出てくるかもしれないから、それを見せ  
たくないっていうのもあるだろうね。自分  
が不利になる証拠を、わざわざ相手に返す  
ことはしないだろうし」

雪奈「けど、そもそもスマホはうちーが自  
分で契約して、自分で携帯料金払ってるや  
つでしょ。会社支給の携帯電話じゃあるま  
いし、やってること滅茶苦茶じゃない」

猛「一筋縄では行かない相手だろうね」

雅也「そうですね……」

雪奈「うちー、何かメモできる紙とペンつ  
てある？」

雅也「ああ、あるよ」

と、デスクのボールペンとメモ帳を雪  
奈に渡す——雪奈、メモ帳にSNSの  
アカウント名を書く。

雪奈「これ、私のアカウント名。無事にアカ  
ウントできたら登録しといて。同級生たち

は、私のアカウントのフォロワーのところから見つければ、順番にフォローできるのでしょ」

雅也「ありがとう。後で登録しとく」

雪奈「ねえ、年末にまた同期たちの飲み会やるけど、うちー来れそう？」

雅也「うん、行く」

雪奈「じゃあ、お店とか決まったら連絡するね」

雅也「ありがと。みんなに会えるの、楽しみにしてる」

雪奈「うちー」

雅也「……？」

雪奈「もう二度と変な気起こさないでね」

大きく頷く雅也。

#### 49 居酒屋（夜）

雅也、雪奈、篤志、裕司、拓海、和也、その他同級生たちが集まっている。

拓海「（裕司に）おっくーは、いつ沖縄に戻

るんだ？」

裕司「まあ今回は少しゆっくりして、年明け五日にでも帰ろうかな。ぐっちは、いつ千葉に戻るんだよ」

拓海「俺は三箇日終わったら戻るよ」

和也「卒業してから、本当にバラバラになっちゃったよな」

雅也「それでもさ、こうやって定期的に集まれて良いと思ってるよ。コロナの時なんかさ、会食は四人までなんて謎のルールがあった、こんな風にみんな揃って集まれることなかったじゃん。ようやく、この一年ちょいで少し緩和されたわけだし」

雪奈「本当に良かったよね」

篤志「（一同に）年末だし、今日これ終わったら、二次会でカラオケでも行くか」

一同「異議なし」

50 カラオケ店・一室（夜）

裕司が歌っている——雅也、雪奈、篤

志、拓海、和也、その他同級生たちが  
それぞれジュースを飲んだり、一緒に  
ノリながら手拍子をしている。

×                      ×                      ×

それぞれ荷物を持って軽く片付けをし  
ながら出ていく雪奈、裕司、拓海、和  
也、その他同級生たち——その場に残  
る雅也と篤志。

雅也「あつぽん……」

篤志「……」

雅也、篤志に抱き着く。

雅也「ごめん……心配かけて」

篤志「良いよ、うちーが無事で良かった」

雅也「あのさ、俺……」

篤志「何も言わなくて良い」

雅也「……」

篤志「大体のことは、ゆきちゃんから聞いた。

二回も同じようなこと話すと、フラッシュ  
バックみたいになって、もっとうちーが  
辛くなるだろ」

雅也「……」

篤志「いろいろ辛かったとは思うけど、これからこの飲み会にはちゃんと来てくれよ。

俺とゆきちゃん、また幹事やるから」

雅也「いつの間にか、あつぽんたちに任せきりになっちゃってたね。俺たち三人のグループLINEも、気がついたら主として動いてるのはあつぽんになってた」

篤志「良いんだよ。俺は好きでやってるんだから」

雅也「ありがと」

篤志「うちーが生きてくれさえいてくれれば、それで良い」

雅也「あつぽん……」

篤志「時間はかかるかもしれないけど、早くいつものうちーみたいに元気になってくれよ」

雅也「うん……」

と、裕司が入ってくると、

裕司「どうした？ もう会計するってさ」

篤志「悪い悪い。人数多いから、忘れ物チエ

ックしてただけだ」

雅也「すぐ行くから」

裕司「あいよ（と出ていく）」

篤志「そろそろ行くか」

雅也「うんッ」

51 雪奈と猛のマンション（夜）

雪奈が帰宅する。

雪奈「ただいま」

スマホでゲームをしている猛が迎えて、

猛「お帰り」

雪奈「いやあ、今日は飲んだわ。みんなと集

まるのは、確か夏以来だから四ヶ月ぶりだ

ったから」

猛「それでも、卒業してから毎年こうやって

会ってるなんてすごいね」

雪奈「まあね」

猛「うっちー、元気だった？」

雪奈「うん。みんなとちゃんと、いつも通り

にワイワイ楽しんだ」

猛「そりゃ良かった」

雪奈「やっぱりうちーには、ああやって笑顔でいてもらわないと。本当、無事に戻ってきてくれて良かった」

猛「例の件は解決まで時間かかりそうだけど、とにかくうちーが元気でいてくれれば、俺たちはそれで十分だよな」

雪奈「うん。次はきっと来年のゴールデンウィークか、夏になると思うから、またその時にみんなと会うの楽しみにしないかね」

猛「その調子だと、もう飲めないかな？」

雪奈「缶チューハイ一杯ならいけそう」

猛「よし、じゃあ飲もう」

雪奈「オッケー」

52 木内家・玄関（数日後）

孝志が釣りの支度をしている——ドアが開き、雅也が出てくる。

孝志「あれ、出かけるのか」



雅也「うん。そっちはまた釣り？」

孝志「ああ。堤防沿いで、ヤマメが結構釣れるんだよ。会社の後輩と行ってくる」

雅也「そっか」

孝志「結構釣れるから、フライにでもしようかな。今日飯は？」

雅也「夕方には帰って来るから」

孝志「分かった」

雅也「じゃあ、行ってきます」

孝志「おお、行つといいで」

## 53 カフェ

雅也と寧々がコーヒーを飲みながら話している。

寧々「元気そうで安心したよ」

雅也「まさか濱口にまで心配されるとはねえ。

（と苦笑して）俺も随分落ちぶれちゃったかな」

寧々「同級生の中でも、結構話題になっただけだからね」

雅也「そうなの？」

寧々「由紀恵って覚えてるでしょ」

雅也「もちろん」

寧々「由紀恵から、ママが消息不明になったって連絡が来てね。何でも由紀恵の知り合いが入っている商工会の集まりで、ママの話が出たみたいで。それで、地元に残ってる同級生たちの中で話が広がったみたい」

雅也「田舎じゃすぐ人の噂って広まるもんね」

寧々「中には、もう生きてないんじゃないかって言う人もいたらしいよ」

雅也「まあ、あながち間違っちゃいないけど」

寧々「……」

雅也「だからか。新しくSNSアカウント作って同級生たちフォローしたら、DMでみんなして『生きてるか』『今どこにいるんだ？』『大丈夫か？』ってメッセージがひっきりなしに届いたんだよ。小学校とか中学校の同級生からも」

寧々「それぐらい、ママがいなくなった話が

広まってたってことだよ」

雅也「随分お騒がせな人間になっちゃったね、俺も……」

寧々「まあ、生きてくれたらそれで良いよ。私たちまだ若いし、いくらでもやり直せるもん」

雅也「そうだね。確か濱口も、仕事辞めて専門学校行ってたんだっけ？」

寧々「うん。高校卒業した後、自動車部品の工場で働いてたけど、何か違うというか、他の仕事もしてみたいと思っちゃって、仕事辞めた後に看護の専門学校に三年通って、今は看護師だから」

雅也「結構変わったね」

寧々「でもね、正直工場で働いてた時より、やりがいを感じてるよ。まあ日々命と向き合う仕事だからっていうのもあるけどさ。どれだけ一生懸命治療しても、結局完治せず亡くなっちゃう患者さんもいるでしょ。そういうのをずっと目にしてるから、なお

のこと、今回のママのことは気が気じゃなかったよ」

雅也「ごめん……」

寧々「いろいろ悩んでた様子は、SNSから見て分かったけど、自分らしさを見失ったら、元も子もないよ」

雅也「自分らしさか……」

寧々「私はさ、高校時代の三年間、ほぼ毎日ママの顔見て来たでしょ。学校っていう環境もあつたかもしれないけど、ママは真面目な時もあれば、楽しくふざけてた時もあつた。そういう切り替えができて、ママっていう個性的なキャラクターを自分で確立してたじゃん。だからクラスで、圧倒的な存在感も見せてたし」

雅也「（苦笑して）そうかなあ。あんまり、そんな自覚はないけど」

寧々「自覚がないからこそ、それがママの自分らしさなんだよ。仕事で大変だった時は、きつとそれが出てなかったんじゃない。例

えばクライアントの言いなりになって、自分自身のコントロールがちゃんとできなかったとか」

雅也「（大きく頷いて）確かに、それについてはいろいろと思いついた節があるけど」

寧々「やっぱりねえ。個性的な人間から個性取っちゃったら、何も残らないもん。まさしくママがそんな状態だったんだよ」

雅也「なるほどねえ」

寧々「仕事は、どうするの？」

雅也「今は休養中だけど、そうそういつまでも休んでるわけにはいかないから、何とか近いうちに仕事復帰しようとは思ってるけどね。まあ、一度全部仕事を失った身だから、ゼロから……いや、マイナスからのスタートになっちゃうけど」

寧々「慌てることはないと思うよ。ちゃんと心身ともに回復してからでも良いだろうし。休んでるうちに、できることから始めてみれば良いじゃん」

雅也「そうだね」

寧々「高校の時みたいに、ゆっくり読書したり、仕事じゃなくても、創作活動として小説とか脚本とか書いたり、こうやって昔から知ってる同級生たちに会って気持ちを落ち着かせてみたさ」

雅也「そういうふうには時間作っても良いかもしれないね」

寧々「そういえば、奈良に行った、志田の店にはもう行ったんだっけ？」

雅也「うん。オープン当日にね、お祝いのお花持って行ってきた。メッセージカードに、勝手に『三年二組同級生一同』って書いて」

寧々「そういうことができるのが、ママなんだよ。まぜそば、美味しかった？」

雅也「そりやもう美味しかったよ。それがきっかけで、今じゃすっかり俺もまぜそば好きになっちゃった」

寧々「クラスの誰かと、奈良まで行って来たら？ 志田も多分、知り合いが誰もいない

奈良県で一人、まぜそばの店をやってること  
とがどれだけ心細いか」

雅也「もうオープンから一年半は経つし、オープン以来行ってないから、顔出してみようかな」

寧々「それが良いよ。あいつだって喜ぶだろうし」

雅也「そうだね」

寧々「まあとにかく、ママにとって一番大事な  
なのは、自分らしさを失わないこと」

雅也「ありがと。もしこれから何かあった時は、濱口のその言葉思い出すよ」

寧々「無理はせずに、ゆっくり復帰してね。」

いつでも話は聞くから。まさか、こんな形で成人式以来に会うとは思わなかったけど」

雅也「俺だって」

寧々「ちよつと、太った？」

雅也「そりゃ高校の時から比べりゃ、十キロ近くは太ったかもね。それでも、この一ヶ月近くで少しは痩せたけど」

寧々「無理もないよね……」

雅也「ストレスの限界だったのか、吐き気がずっと止まらなかったり、風邪でもないのにずっと咳が止まらなかったこともあってね。市販の風邪薬とか咳止め薬飲んでも、全然収まらなかったんだよ」

寧々「ああ、多分それ『心因性咳嗽』ってやつだね」

雅也「何、その心因性何とかって」

寧々「『咳嗽』っていうのは、漢字の通り咳なんだけど、心因性、つまりストレスが原因で起きる咳のこと。緊張状態の時は咳が止まらなくなるんだけど、リラックスしてる時とか集中してる時、あと眠ってる間は咳が出ないのが特徴」

雅也「ああ、多分それかもしれない。前までは本当に酷かったけど、今は全然咳しなくなっただもん」

寧々「体は正直だからね。それに、ママは結構ナイーブな感じがするから、きっと人間



関係とかいろんなものが重なってストレスになって、咳が止まらなくなったんだと思う。自分ではストレスって感じてなくても、案外ストレスになってることもあるしね。だから今後は、そういう吐き気とか咳が出てきたら、自分の中の黄色信号が点滅したと思ったほうが良いよ」

雅也「うん、それ意識してみるよ。（とタブレットを取り出して文字を打ち）えっと、『心因性咳嗽』ね。ああ、こうやって書くんだ。うん、覚えた」

寧々「私は看護師だから、カウンセラーでも精神科医でもないけど、普段病気を抱えている人を見てるし、最低限の医療知識はあるほうだと思ってるからね。もし何か体の異変を感じたら、私に連絡して。（と思い出したように）あ、それにさ、ママと一緒にコンピュータ部にいた美彩だって、今は看護師やってるんだもん、いくらでも相談相手いるじゃん」

雅也「言われてみれば、そうか。美彩とも何年も会ってないな。五十川君は大阪からここにに戻ってきたって話は聞いたけど全然会えてないし、春奈は彼氏さんと一緒に同棲するからって東京行っちゃったから、みんなが集まることもなかったけど」

寧々「環境が変わっちゃうと、本当に集まらなくなるよね。地元を離れる子だっているわけだしさ」

雅也「うん。だから今日こうやって濱口と会えてるのが不思議でしようがない。連絡くれてありがとう」

寧々「一度、様子見ときたかったからさ。まあでも、この感じなら大丈夫だね。由紀恵にも、ママは元気だったって伝えとくわ」  
雅也「滝にまで心配かけてとは思わなかった。ママは何か元気だからって言うって」

寧々「はいはい。確かに伝えときます」

笑い合う雅也と寧々。

54 木内家・全景（夜）

55 同・雅也の部屋

風呂上がりの雅也が入ってくると、机の上に置いてあるタブレットを手にする――操作をしている手が止まると、ホッと嬉しそうに微笑む。

56 同・事務所（表（数日後））

雅也が原稿用紙に向かって万年筆で原稿を書いている――表に一台の乗用車が停車したことに気がつく。

乗用車のドアの開閉音がし、ドアが開き、賢哉が顔を出す。

賢哉「よう、生きてたか」

雅也「かどけん……」

賢哉「行くか？」

雅也「うん」

57 高速道路を走る乗用車

58 その車の中

運転席に賢哉、助手席に雅也。

雅也「（ナビを見て）高速道路使っても、奈良県まで結構あるね」

賢哉「到着時間、微妙だな」

雅也「確かに今から行っても、昼の営業終わっちゃうね」

賢哉「奈良って、どつか時間潰すところあつたかな」

雅也「奈良公園とか、石舞台古墳とか」

賢哉「お前相変わらずチョイスが渋いな」

雅也「小六の時の修学旅行が京都と奈良だったから、そのイメージが強くてさ」

賢哉「ああ、そういや俺も小学校の修学旅行は京都と奈良だったな。京都タワーの下で、木刀買ってさ」

雅也「俺たちの同級生もいたわ」

賢哉「お前どうせあれだろ、奈良漬け買って

たんじやないのか」

雅也「何で分かるの？」

賢哉「お前の行動パターンは大体読めるよ。  
直接会わなかった期間はあったけど、だて  
に十何年もお前の友達やってねえよ」

雅也「そうだね」

賢哉「志田は、お前が消息不明になったこと  
は知らねえ。俺のところにも連絡来たとき  
はびっくりしたけど、地方にいるあいつに  
まで伝えることはないと思ってさ」

雅也「そっか」

賢哉「奈良に行く前に、大阪にでも寄るか」

雅也「大阪？」

賢哉「大阪に『ボートレース住之江』っての  
があるんだよ。せつかく関西行くんだった  
ら、そういうところにも行ってみるか」

雅也「相変わらず、競艇好きなんだね」

賢哉「当たり前だろ。ボートレースは俺の  
：

雅也「第二の庭でしょ」

賢哉「分かってんじゃねえか」

雅也「もう聞き飽きたぐらい、そのフレーズ  
耳にしてるから」

賢哉「それもそうだな」

雅也「もう子どもだって二人いるんだから、

お父さんの真似したらどうするんだよ」

賢哉「俺だって親父に小さい時から連れていかれたんだ。このDNAはちゃんと受け継がないとな」

雅也「奥さんにどう言われても知らないよ。

あれ、今上の女の子が何歳になったんだっけ？」

賢哉「今二歳半」

雅也「確か、下の男の子は年子だったよね」

賢哉「ああ」

雅也「あれもびっくりしたよ。LINEのトップ画の赤ちゃんが、いつの間にか二人になってるんだもん」

賢哉「特に誰にも言ってなかったからな」

雅也「まあ、いちいち言わないか。俺も結局

誰にも何も言わずにこうなっちゃったわけだから」

賢哉「それでもさ、お前はちゃんと俺に二人目が生まれたことに気づいて、出産祝いくれたじゃないか。俺たちの同級生の中で、お前ほど気配りができる人間なんていねえよ。本来のお前はそういうやつだってことはよく分かってる。だからもう、過去のことは忘れろ」

雅也「……うん」

賢哉「そのサービスエリアで休憩するか。トイレ行きてえわ」

雅也「俺も」

59 大阪・ボートレース住之江・全景

60 同・同・会場

レースが行われており、海上を六台のボートレースが走っている——観客席でその様子を見ている客たち。その中

にいる雅也と賢哉。

賢哉「（雅也に出走表を見せて）お前どう思うよ」

雅也「えっとねえ、1-4か1-5かな」

賢哉「おお、良いところくな」

雅也「ホント？」

賢哉「じゃあ次は、二連単でやってみるか」

雅也「三連単じゃなくて？」

賢哉「いや、次は二連単にするわ」

雅也「まあ、俺が買うわけじゃないし、ここはベテランのかどけんに任せます」

賢哉「よし、舟券買ってくる」

雅也「うん」

×

×

×

次のレースが開催されている——出走する六台のボートレース。

雅也「行けッ。行け、良いぞッ」

賢哉「（雅也を見て）お、お前がそんなに力入るなんて珍しいな」

雅也「だって予想当たってほしいもん」



賢哉「（レースを見て大きな声で）おいおい  
おいおい、行け行け行け、よしッ……よし、  
来たあッ」

雅也「（賢哉に）え、「ト」？」

賢哉「おお。まあ予想が多いから、千円ぐら  
いにしかないけど」

雅也「けど、一枚百円のその舟券が千円にな  
るんなら十分じゃない」

賢哉「この千円で、志田のまぜそば食うか」

雅也「一人分にしかないじゃん」

賢哉「それもそうか」

微笑んでいる雅也。

# 61 奈良・コインパーキング（夜）

賢哉の運転する車が駐車する——運転  
席と助手席からそれぞれ降りてくる賢  
哉と雅也。

賢哉「（時計を見て）九時か、ちょうど良い  
ぐらいだな」

雅也「閉店直前なら、志田ともゆっくり話せ

るもんね」

62 同・まぜそば『ひばな』・店

カウンターだけのこじんまりとした店舗。  
最後の客が出ていく――厨房側で調理

をしている悠喜。

悠喜「ありがとうございます」

と、そこへ、雅也と賢哉が入ってくる。

悠喜「いらつしやいませ。（と雅也たちに気づいて）おお、待ってたよ」

雅也「こっちに着く時間が微妙だったから、かどけんと一緒に大阪の住之江競艇場に行ってたの」

悠喜「（賢哉を見て）相変わらずだな、おっちゃんは。まずは、久しぶり」

賢哉「本当久しぶりだな。（と雅也を見ながら）こいつから、まぜそばの店をオープンしたって話聞いたときはびっくりしたよ」

悠喜「まあ、何とかやってるよ。（と食券機

を指して）食券買ったら、ここ座ってよ。

もう多分この時間になったらお客さん来な

いと思うし」

雅也「ありがと」

賢哉「どれにしようかな」

雅也「迷うんだよねえ、どれも美味しそうだ

から」

×

×

×

席に座っている雅也と賢哉——まぜそばを運んでくる悠喜。

悠喜「はい、醤油まぜそば大盛り二つ。煮卵、残り四個だったから、それぞれ一個ずつサ

ービス」

雅也「ありがと」

賢哉「サンキュー」

雅也・賢哉「いただきます（と食べ始める）」

悠喜「今日のボートレースはどうだった？」

賢哉「珍しくこいつがエンジンかかった」

悠喜「へえ、木内がそうなるなんて珍しいな」

雅也「せっかく予想したからさ、その通りに

なつてほしいじゃん」

悠喜「（後片付けをしながら）今日、この後時間ある？」

雅也「良いけど。明日もお店でしょ」

悠喜「まあゆっくりはできないけど、すぐ近くにコンビニあるから、そこでちよつとダベろうかと思って」

賢哉「良いぞ」

雅也「久しぶりに、この三人が顔揃えたんだもんね」

悠喜「ああ」

雅也と賢哉、美味しそうにまぜそばを  
食べ進める。

63 同・コンビニの駐車場（夜）

缶コーヒーを飲みながら話している雅  
也、賢哉、悠喜。

雅也「高校の時なんか全然勉強してなかった  
志田が、あれだけ立派なお店開くなんて、  
本当にすごいよ」

悠喜「高校卒業してから、美容師になったり、車のディーラーになったこともあった。自分でも、まさかまぜそばの店やるなんて思ってもみなかったさ」

賢哉「奈良には、いつ来たんだ？」

悠喜「四年前かな。ディーラーの時、奈良の店に異動になったんだよ。それで一年近くはそこで働いたんだけど、結局また違う仕事をしたいって思うようになって、ラーメン屋で二年ぐらいかな、修業してそれで一年半前にあの店をオープンしたんだ」

雅也「解せ場なことかもしれないけど、結構資金かかったんじゃないの？」

悠喜「まあ信金からの借り入れは結構あるんだよ。だから今はとにかく、その分を返すのに必死でね。さすがに一人で年中無休でやるのは限界だから、アルバイトも雇ってるけど」

雅也「家賃とか光熱費とか人件費とか、結構かかりそうだもんね」

悠喜「木内のほうが、そういうのは詳しいか。

そっちだって、事務所構えてやってるじゃないか」

ないか」

雅也「けどうちは、プレハブを家の敷地内に置いただけの事務所だから。家賃も人件費もかからないし、光熱費だったかが知れてる。かかったのは、プレハブを設置するときの基礎工事と設置工事の分ぐらいだから」

賢哉「それでも、木内も志田も一国一城の主で頑張ってるじゃねえか」

雅也「かどけんだって、マイホーム買ったじゃん」

悠喜「え、そうなのか？」

賢哉「ああ、一年前にな。二人目が生まれた時に、さすがにアパートじゃ狭かったから、思い切って」

悠喜「すげえな」

雅也「高校卒業から、ちょうど十年経って、こんな話するなんて思わなかったね」

悠喜「人生何があるか分かんねえな」

雅也「本当、人生って分かんない」

賢哉「……」

悠喜「まあ、お互い何とか頑張るしかねえか」

雅也「うん」

賢哉「そうだな」

悠喜「みんな、元気にしてる？」

雅也「またみんなで会うか」

悠喜「安代、どうしてるかな」

賢哉「死んだんじゃね」

雅也「何てこと言うの。新聞の定年の欄に名

前見なかったけど、まだどっかで教員やつ

てるのか、俺が見逃してたかな」

悠喜「マンション帰ったら、卒アル見てみよ

う」

雅也「あ、俺も見てみる。懐かしい気持ちに

なるかも」

賢哉「二年生までの写真載ってたら、俺も映

ってるかもな」

雅也「だね」

悠喜「（笑って）いや、今日は二人とも遠いところ来てくれてありがと。そうしょっちゅう来てくれとは言えないけど、また近くまで来たら寄ってよ」

雅也「もちろん」

賢哉「また食いに来るよ」

微笑み合う一同。

64 高速道路を走る乗用車（夜）

65 木内家・表く乗用車の中（深夜）

賢哉の運転する車が停車する――運転

席に賢哉、助手席に雅也。

雅也「今日は、ありがと」

賢哉「こちらこそ」

雅也「志田も奈良で一人頑張ってるんだから、俺もまだまだ頑張らないとね」

賢哉「無理すんなよ」

雅也「うん」

賢哉「今日、三人で会って、高校時代の頃が



蘇ったよ」

雅也「俺も」

賢哉「みんな、元気にしてるかな」

雅也「してるよ、きっと。今回さ、かどけん  
誘ったじゃん。実はね、この間濱口と会っ  
て、クラスの誰かと志田の店に行って来た  
らって提案してくれたの」

賢哉「濱口って、女子六人の中にいた、あの」

雅也「そう。成人式以来だったよ。濱口も今、  
看護師になって医療現場で頑張ってるみた  
い」

賢哉「そっか」

雅也「懐かしいね、高校の頃が。毎日時間割  
聞いてくる奴もいれば、テスト範囲を前の  
日の晩に教えてくれってメールしてくる奴  
もいれば」

賢哉「俺は途中で辞めたけど、あのクラスは、  
お前がいたから成立したんだよ」

雅也「（苦笑して）そうかな」

賢哉「今日三人で集まった時も、あの当時の

バランスが変わってないような気がした」

雅也「……」

賢哉「お前はあの頃と変わらない木内でいてくれよ。俺たちにとっては、大事な連れなんだからよ」

雅也「かどけん……」

賢哉「まあ、しょっちゅうは会えないかもしれないけど、お前のことは応援してるから」

雅也「ありがとう」

賢哉「住んでる場所も、働いてる環境も違っても、ちゃんと生きてりゃ、それで良いんだよ。人生なんていくらでもやり直せるんだから。俺なんて、どれだけ環境がコロコロ変わってることか」

雅也「（苦笑して）そうだね」

賢哉「いやあ、久しぶりにお前と会えて良かったよ。明日からまた頑張れそうだわ」

雅也「俺も」

賢哉「じゃあな」

雅也「うん、ありがとう」

と、車から降りる――賢哉の乗用車が  
去っていき、手を振って見送る。

66 公園（イメージ）

桜の木が満開になっている。

67 木内家・全景（朝・数日後）

68 同・居間

真保が新聞広告を見ている。

真保「（何かに気づいて）ん……？」

と、寝起きの孝志が入ってくる。

真保「ねえ」

孝志「何だ？」

真保「これ見てよ（と広告を見せる）」

孝志「これって」

真保「このイベントって、二色がプロデュースしてるやつよね」

孝志「雅がいなくなったことでイベントがで  
きなくなったみたいなこと、この間の通知

書に書いてあったけど、イベントできてる  
じゃねえか」

真保「イベントの資金、どうなってるんだろ」

孝志「え？」

真保「だって、雅はお金貸したままなんだよ。  
お金も返さずに、次のイベント開催するな  
んて、一体どういうつもり……」

孝志「チラシを折り込みしたら、必然的に俺  
たちの目に留まることだって分かってるは  
ずだろ。わざと俺たちに気づかせようとし  
てるんだよ」

真保「私たちのこと舐めてるのかしら」

孝志「よし、このことも含めて弁護士に相談  
するぞ」

真保「……」

孝志「スマホもパソコンも、何なら金も返し  
てもらってない。そればかりか、一方的に  
悪者にされて、またこんなことされてるん  
だぞ。このまま黙って見てられるか」

真保「そうね……」

69 同・事務所

雅也が、着せ替え人形の箱をラッピン  
グしている——真保が入ってくる。

雅也「どうしたの？」

真保「二色が、イベントやるって」

雅也「え？」

真保「今日の新聞の折り込みに入ってた」

雅也「そう……」

真保「父さんが弁護士と相談するって」

雅也「分かった」

真保「あの女も何考えてんだか。（と雅也を  
見て）何してんの？」

雅也「見りや分かるじゃん。プレゼント、ラ  
ッピングしてるの」

真保「ああ、あの……何ちゃんの誕生日プレ  
ゼントだっけ」

雅也「いろはちゃんね。来月のゴールデンウ  
イーク明けで、一歳になる」

真保「いつ会うんだっけ？」

雅也「来週の土曜日。明美ちゃんも、その日は仕事休みだから」

真保「ああ、ちょうど二色のイベントの日だわ」

雅也「……」

真保「公園の屋外ステージでやるイベントらしいから、遠目で見てやろうかな」

雅也「本気……？」

真保「あんたを精神的に追い詰めた女の顔がどんななのか、この目で見てやろうと思つて」

雅也「好きにしたら。多分俺、あの女の顔見たら、フラッシュバック起こしておかしくなりそうだから」

真保「そう……」

雅也「（ラッピングを終えて）よし、できた」

70 総合公園（翌週）

来場客で溢れかえっている——真保と健次郎が歩いている。

× × ×

特設ステージで、熱唱している知永。

椅子に座っている客や、立ち見の客が  
手拍子をしている——立ち見客の間に  
やってくる真保と健次郎。

健次郎「あれが、二色知永……」

真保「よくあんな意気揚々と歌えるわね。人  
の息子散々な目に遭わせといて」

健次郎「あんな女に、兄貴は振り回されてた  
んだ」

真保「そうね」

健次郎「仕事がなかったら、父さんにも見て  
もらいたかったな」

真保「現場にいたら、何しだすか分かんない  
けどね」

健次郎「まあな……」

ステージで歌い続けている知永。

# 71 駅・改札前

明美が、ベビーカーに乗せた娘・いろ

は（１）と共に待っている——紙袋  
を持った雅也が出てくる。

雅也「お待たせ」

明美「良かった、元気そうで」

雅也「（苦笑して）まあね。（いろはを見  
て）いろはちゃん、大きくなったね」

明美「……」

72 水族館・館内

雅也とベビーカーに乗せたいろはを運  
んでいる明美が歩いて回っている。

73 同・レストラン

雅也、明美、いろはが昼食を食べてい  
る。

雅也「（紙袋を渡して）はい、これ。いろは  
ちゃんの誕プレ」

明美「ありがと。（いろはに）良かったね、  
おじさんから誕生日プレゼントもらったよ」  
雅也「おじさんはないでしょ、せめてお兄さ



んにしてよ」

明美「いやいや、おじさんだって」

雅也「まあ、お母さんと同年代の人ってことだから、いろはちゃんからしたらおじさんになっちゃうか。（と苦笑して）それにしても、明美ちゃんもよくやってるね。妊娠をきっかけに結婚するって話聞いた時はダブルで驚いたけど、まさか臨月のタイミングで離婚するとは思わなかった」

明美「あんな男に、いろはの父親をさせるわけにはいかなかったからね。あのままモラハラが続いてたら、私もおかしくなりそうだったから」

雅也「いろはちゃんが産まれた時に、出産祝い持ってったでしょ。あの時、別れた旦那が酷い男だって話は何とか聞いてたけど、今思えば、いろはちゃんのこと考えると、離婚して正解だったのかもしれないね」

明美「でき婚で婚姻届出だけで済ませたでしよ。もし盛大に結婚式挙げてたら、とん

でもないご祝儀泥棒になるところだった」

雅也「一年ちよい？」

明美「そうだね。本当、スピード婚のスピード離婚だった」

雅也「一人で子育てするのも大変なんじゃない？」

明美「あの男の妻でいること考えたら、天地ほどの違いがあるんだから。この子がいてくれるから、私だって生きる張り合いがあるもん」

雅也「お母さんに似て、たくましくて、元気で、先輩のことを先輩と思わない強い女の子になるかもね」

明美「それ、私のこと？」

雅也「先輩って思ってないでしょ、俺のこと」

明美「思ってるよ」

雅也「本当？」

明美「本当だって。先輩と連絡つかなくなつた時だって、本気で心配したんだから」

雅也「それについては、弁解も何もするつも

りありません」

明美「まあ何があったかは聞かないけど、いろいろ大変だったのは察しがつくよ。でも、無事で良かった」

雅也「うん……」

明美「これからも定期的に会おうよ。いろはにも会ってもらいたいし」

雅也「そうだね。SNSで、たまにいろはちゃんの写真見てると、どんどんお母さんに似ていくんだろうなと思うし、何だか親戚のおじさんみたいな感じで見ちゃうんだよね」

明美「やっぱりおじさんなんだよ、先輩は」  
雅也「よその子の成長は早いつて言うけど、本当だよ。前に会った時は、まあ出産してすぐだったこともあってこんな小さくて、ミルクもあげたでしょ。一年でこんなに大きくなるかな」

明美「夜泣きしたり、お乳あげないといけなかったりで、正直大変な時もあったよ。で

もさ、ある意味では、この子は私の分身みたいなもんでしょ。子どもは何歳になっても自分の子どもだし、私がこのお腹を痛めて産んだ子どもだから、何があっても守ってあげないといけないっていう責任も出てくるしね」

雅也「明美ちゃんも、たくましいお母さんになるだろうね。いろはちゃんも、こんなお母さんがそばにいてくれたら、心強いだろうね。学生時代から、いろんな意味で強かったお母さんだから」

明美「まあ、それ否定しない。(と苦笑して)先輩とは桜も見に行っだし、いろいろ助けてもらったよね。秋に見に行った紅葉は枯れちゃってたけど」

雅也「あったね、そんなことも」

明美「今年に行けなかったけど、来年は一緒に桜見に行こうよ。いろはも喜ぶだろうし。それに紅葉だって、次こそは」

雅也「うん」

明美「一昨年だっけ、夏にひまわり畑見に行つたよね」

雅也「行った」

明美「じゃあ、夏もひまわり見に行こう」

雅也「良いよ。その都度、いろはちゃんに会えたら俺も楽しいし」

明美「父親がいない分、いろはには二倍の幸せを注いであげないとね。それが、私の義務だと思ってる」

雅也「……」

明美「父親のいない子どもにはしたくなかったよ。でも、あの男にだけは、いろはの父親を名乗ってほしくなかった。親の勝手に母子家庭にはなっちゃったからこそ、いろはに寂しい思いをさせないようにしてあげるのが、母親としての義務であり、責任だと思ってる」

雅也「それだけの覚悟があれば十分だよ。俺も、どこかのおじさんっていう立場で、いろはちゃんの成長を見守るよ」

明美「ありがと。（いろはを見て）あ、どうりで静かだと思ったら、もう寝てるわ」

スヤスヤと眠っているいろは。

雅也「（いろはを見て）可愛い寝顔だね。こりや、また次に会える楽しみが増えたわ」

明美「もう少し大きくなったら、一人で歩けるようになる。その時は、一緒に歩いてくれる？」

雅也「良いよ」

明美「はたから見たら、家族に思われるかもね」

雅也「まあ、絵面的にはそうなっちゃうか」

明美「いろはに、偽物のパパだと言ってちゃおうかな」

雅也「俺の周りで炎上するからやめて」

明美「はいはい」

笑い合う雅也と明美——雅也、いろはの寝顔をもう一度見て微笑む。

75 同・夫婦の部屋

真保と孝志が話している。

孝志「そっか。呑気に歌ってたか」

真保「はたから見たら普通のおばさんだったよ。あんな女が、雅を精神的に追い詰めたって思うと、人って見かけによらないね」

孝志「どんな女か知らねえけど、裏表が激しいってことだろ。さすがに観客の前でパワハラみたいなことはしないだろうけど」

真保「感情の起伏が激しいってやつよね」

孝志「弁護士への相談、今度の水曜日、午後から休み取ったから、その時行くぞ」

真保「分かった」

孝志「何が損害賠償だ。こっちがもらいたいぐらいだよ」

真保「イベント当日がバタバタだったり、次のイベントができなくなるのは雅のせいだって一人悪者にしてるけど、ちゃんとイベントだってできてるもんね」

孝志「虚偽報告ってやつだからな。向こうに  
とっては、自分の首絞めてるって気付かな  
いんだろうな」

真保「多分向こうの代理人弁護士も、二色の  
イベントの状況までは把握してないでしょ」  
孝志「二色の言いなりになって書類作っただ  
けだろ。多分、こっちが今回のイベント講  
演のこと突っ込んだら、どんな反応するか  
な」

真保「びっくりするだろうね。虚偽報告が不  
利になるっていうことは、弁護士なら分か  
るだろうし」

孝志「ああ、思い出すだけで腹が立ってくる  
わ。こんなにイライラしたの久しぶりだぞ、  
仕事でもこんなことにならないのに」

真保「人を怒らすのには長けてるのかもね、  
二色は」

孝志「とりあえず、スマホとパソコンの返却、  
それからギャラと立替経費、貸した金の精  
算の相談だな」



真保「払ってもらえないお金にプラスして、

こつちも慰謝料請求する？」

孝志「当たり前だろ。雅は死にかけたんだぞ。

そこまで追い詰めたんだから、それ相応の

対応してもらわないとな」

大きく頷く真保。

76 同・事務所（夜）

タブレットを操作しながら、原稿用紙  
に向かってる雅也。

雅也「よし、できた」

77 広島・木内家・表（朝）

好乃が洗濯物を干している——一台の

軽自動車が入ってきて、運転席から素

子が降りてくる。

素子「おはようございます」

好乃「あら、早かったわね」

素子「思ったよりも車が空いとったんよ」

好乃「お父さん、まだ寝よるわ」

素子「よう寝るの」

好乃「夜遅くまでテレビ見るのは勝手じゃけど、つけっぱなしでいつも寝よるけん困つとるんじゃ。私が夜中にトイレで起きる時に消しとるけど」

素子「いつものことじゃろ」

好乃「本当に困ったもんじゃわ」

78 同・同・台所

好乃と素子がコーヒーを飲んでいる。

素子「まあ君、あれから元気にしよるんか」

好乃「この間電話した時は、まだ声が元気そうやなかったけどな」

素子「あのまあ君があんなことまでするなんて、相当悩んでたんやろうな」

好乃「真保さんから聞いたんじゃけど、雅を追いつめたっていう女の人、逆に雅に損害賠償を請求するっていう通知書を送ってきたらしいわ」

素子「え、そんなことになりよるんか？」

好乃「結局正式に損害賠償を請求するっていう連絡は特に来ないから、ただの脅しだったんじゃないかって真保さんは言うのってわ」

素子「脅しなんてしたら、またまあ君参っちゃうやろ」

好乃「そうなんよ。雅のこと、相当恨んどるんやろうか」

素子「ある種の、大人のいじめってやつかもしれないね」

好乃「無理なんてせんでもええわ。ちゃんと生きてさえくれりや。私にとっては大事な孫なんじゃけ」

素子「そうじゃね」

と、ドアが開く音がする。

好乃「あ、お父さん起きたな」

と、彦蔵が入ってくる。

素子「おはようございます」

好乃「お目覚めですか」

彦蔵「何や、素子来よったんか」

好乃「今日ご飯食べに行くって、昨日言うたじゃろ」

彦蔵「わしゃ聞いとらん」

好乃「どうでも良いことは覚えといて、肝心なことは忘れよる」

彦蔵「（素子に）ホルモン作ったけえ、持つてくか」

素子「うん、ありがと。いただきますわ」

好乃「（時計を見て）昼時だと混むけえ、そろそろ支度するかね。（と彦蔵に）着替えて用意しとくけ、早う着替えてや」

彦蔵「分かっとるわ」

好乃「はあ、全く……」

と、ブツブツ言いながら出ていく——  
苦笑して見ている素子。

# 79 木内家・事務所（朝）

雅也が入ってくると、デスクに座る——  
机の上に、雅也と浩平が映る写真の入った写真立てが立てかけられている。

雅也「おはよう、眞榮田。今日も頑張るわ」

80 雪奈と猛のマンション

雪奈と猛が出てくる。

雪奈「鍵かった？」

猛「バッチシ、行こ」

雪奈「うん」

出ていく雪奈と猛。

81 京都・篤志のアパート（朝）

リモート会議をしている篤志。

82 工場（朝）

製造ラインで働いている賢哉。

83 奈良・まぜそば『ひばな』・店

仕込みをしている悠喜。

84 病院・病室

患者の点滴交換をしている寧々。

85 公園

いろはの乗ったベビーカーを引いて散歩している明美。

86 駅・表（一ヶ月後・夜）

乗用車が停まり、助手席から雅也が降りてくる――運転席に健次郎。

雅也「じゃ、行ってくる」

健次郎「帰り分かったら連絡しろよ」

雅也「はいはい」

87 飲食店の並ぶテナントビル・全景（夜）

88 同・個室居酒屋・一室

雅也、雪奈、篤志が集まっている。

雅也「ごめんね。ゆきちゃんにも時間作ってもらって、あつぽんにもわざわざ京都から」

篤志「うちーから誘われたんだ。すぐ飛ん  
でくるよ」

雪奈「私だって」

雅也「ありがと。実はさ、進展ってわけじゃないんだけど、二人にはいろいろ話しとかなきやと思っただけ」

雪奈「例のプロデューサーの件？」

雅也「うん。先月ね、うちの親が名古屋の弁護士事務所に行って、相談に行ってくれたの。イベントができなくなるって言ったのに、ゴールデンウィークの時、イベントやってたって話したでしょ。その事も踏まえて、向こうに指摘したの」

篤志「それで、どうだった？」

雅也「（苦笑して）通知書送ってきた勢いはどこへ行ったのやら、全く無言を貫き通してる」

雪奈「え、逃げてるってこと？」

雅也「逃げてるって言っても、事務所の場所とは分かってるの」

篤志「じゃあ、直接攻めちやえば良いじゃねえか」

雅也「それが出来たら苦労しないよ」

雪奈「できないの？」

雅也「前に届いた通知書に書いてあったの。

これからは代理人弁護士を通じてやり取りをするから、直接やり取りするようなことがあれば法的手段を取るって」

雪奈「散々振り回しといて、都合が悪くなる  
と逃げるなんて、結局自分が不利な位置にあるって言うてるようなもんじゃん」

雅也「だから、これからどうしてくかは、弁護士さんと相談して進めてく。ただ、これは俺にとっては結構長い戦いになりそうなの。相手が相手だから、この件が解決するまでには時間がかかるってことは、自分でも分かってるから」

雪奈「……」

篤志「……」

雅也「スマホもPCもないから、相変わらず連絡は取りにくいんだけど、このまま解決するまで何もしなかったら、俺、何もでき



ないでしょ。だから、中古で安いパソコンがあつたから、それで仕事進めることにした」

篤志「そっか。まあ、特にうちーの場合、パソコンがないと何の仕事にもならないもんな」

雅也「うん」

雪奈「早く、パソコンとか戻ってくると良いね」

雅也「もし戻ってきたら、サブパソコンみたいな感じでやってくよ。片方でパソコン操作して、片方でリモート会議やつたりとか」  
雪奈「そっか、そういう使い方もあるもんね」  
雅也「ただ、事務所としては一旦たたもうと思ってるの」

篤志「『オフィスツリーイン』、締めちゃうのか？」

雅也「あんなことがあって、結局元の取引先とも連絡取れないし、とてもじゃないけど、これだけ期間が開いたら、前みたいな仕事

はできないでしょ。だから、ちょっと規模を縮小して、リニューアルしようと思っ  
ね」

雪奈・篤志「リニューアル？」

雅也、鞆に入ったクリアファイルから、一枚の紙を取り出す――『脚本家・岩島雅』と筆文字で書かれている。

雅也「『岩島雅』。俺の、新しいペンネーム」  
篤志「何だろ。ペンネームなのに、文字の羅列から、うっちー臭が漂ってる」

雅也「え？」

雪奈「確かに。『木内雅也』でも『うっちー』でもないのに、『岩島雅』って文字見たら、何故かうっちーっていう感じがする」

雅也「結構考えたほうなだけだな。『岩島雅』としてのSNSのアカウントも作り直したし、タブレット使って、ホームページも作っただから」

雪奈「早いね、準備が」

雅也「まずは形から整えていかないとね」

篤志「『岩島雅』か、良い名前だな」

雅也「本名で活動すると、あのプロデューサーにまた攻撃されそうな気がしてさ。そのリスク回避でもあるの」

雪奈「それは利口な判断かも。私ね、猛から教えてもらって、あれから『ガスライティング』について調べてみたの。それにね、えっと……『自己愛性パーソナリティ障害』っていうのにも当てはまってると思ったの」

雅也「『自己愛性パーソナリティ障害』？」

雪奈「そう。（とスマホを取り出して）『自分』は特別な存在であり、他人よりも優れているという根拠のない感覚があって、成功や権力、理想的な愛についての空想にふける。他人からの過剰な賞賛を常に求め、それが得られないと不機嫌になったり怒ったりする。他人の感情やニーズを理解したり、それに寄り添ったりすることができない、あるいはしようとしめない。他人を利用し、傲慢な態度をとったり、批判に過敏に反応

して激しく怒ったりするといった行動に繋がる』だって」

雅也「めちゃくちゃ当たってる。イエスマンみたいに、自分に従ってくれないとすぐ不機嫌になったの。俺が意見言った時も、

『口答えした』って言われた」

雪奈「（スマホを見ながら）発言に一貫性がないのは、どう？」

雅也「うん、あった。昨日と今日で言ったところが百八十度違った。だから指示がめちゃくちゃで、いろんな準備が大幅に遅れたこともあった」

篤志「そんな奴に振り回されて、うちも本当に大変だったな」

雪奈「ストーリーカーみたいに、相手を執拗に追い詰める特徴もあるから、ペンネームで活動再開するのは、賢明な判断だよ」

篤志「今の時代、ましてやずっと本名で活動してきたうちーだから、名前検索されたら一発で分かっちゃうもんな」

雅也「そう。だから『岩島雅』っていう新しい名前で、生まれ変わったつもりで、再スタートしようと思ってさ」

篤志「そっか」

雅也「広島にいる時ね、おばあちゃんに言われたの」

×

×

×

〈フラッシュ〉

広島木内家の台所での好乃。

好乃「今日であんたは一回死んだ。今日から生まれ変わったつもりで、人生やり直すんや」

×

×

×

雅也「……」

雪奈「そう、そんなことおっしゃったんだ」

雅也「あの言葉を聞いて、生まれ変わるにはどうしたら良いのかなと思ってたんだけど、その結果が、これ」

雪奈「うん……うちーが、そう決めたんなら、良いと思うよ」

雅也「ありがと。（と篤志に）あつぽんには、  
『うちーコーナー』に並べる作品なくな  
っちゃうけど……」

篤志「どんな名前だろうが、うちーはうちー  
だろ。中の人が同じなら、それで良い  
じゃねえか。それに脚本ってなると、  
YouTubeとかアプリ配信とか、そういうドラ  
マだってこれから増えてくだろうし」

雅也「うん。まあ、どこかのタイミングでフ  
リーペーパーとか、前みたいに残るよ  
うなものも作れたらなって思ってる。あつ  
ぽんは、俺にとっての大事なファン一号だ  
からさ、いつかきつと、物として渡せるも  
のを作れるように頑張る」

篤志「うちーのタイミングでやれば良いさ。  
俺は、いつでも待ってるから」

雅也「ありがと」

雪奈「でも良かった。うちーが、ちゃんと  
復活してくれて」

篤志「本当だな」

雅也「俺ね、広島から戻ってきても、正直頭の中では、死ぬことばかり考えてたの。どうやったら確実に死ねるのか、そんなことばかりね……」

雪奈「……」

篤志「……」

雅也「一度は、向こうで地元の造船会社の会長さんに助けてもらったけど、それでも生きる望みがつかめないままだった。心身共にボロボロで、まるで何かに操られてるような状態だった。けど、ゆきちゃんが、皆さんとうちにきてくれたことがあったでしょ。あの時、ゆきちゃんが俺の顔見た途端に泣き崩れたのを見て、目が覚めたの」

雪奈「……」

雅也「俺は今まで何してたんだろ、どうして死のうなんて考えてたんだろうって。俺が死んだら、ゆきちゃんやあつぽんだけじゃない、同級生たちは悲しむだろうなって気付いてさ。俺、こんな身近な人を悲しませ

ようとしてたんだと思うと、自分の行動が  
恥ずかしくなったぐらいだもん。あの時、  
ゆきちゃんが猛さんと来てくれなかったら、  
俺は今でも復帰できるような精神状態じゃ  
なかったと思う」

篤志「ゆきちゃんの涙が、うっちーを変えた  
ってわけだ」

雅也「うん、そういうこと」

雪奈「私は別に、そんなつもりじゃなかった  
んだけどね。あの涙は、うっちーが無事で  
ホッとした安堵の涙と、心配かけた怒りの  
涙だったかもしれない」

雅也「まあ怒るのも無理ないよね。いきなり  
姿消しちやっただから。本当にごめんな  
さい」

雪奈「もう良いよ。私たちは、うっちーが元  
気でいてくれたら、それで良いんだから」  
篤志「俺も。おかえり、うっちー」

雪奈「おかえり」

雅也「……ただいま」



篤志「よし、乾杯するか」

雅也「え、さっきやったじゃん」

篤志「あれは、いつもの形式的な乾杯だろ。」

今からやるのは、うちの新しい門出を

祝う乾杯なんだから」

雪奈「そうだね。乾杯しよう」

雅也「うん。じゃあ、改めて……」

一同「かんぱーい」

と、それぞれのグラスを持って乾杯する。

89 同・表

エレベーターから出てくる雅也、雪奈、

篤志。

90 繁華街（夜）

雅也、雪奈、篤志が歩いている。

雅也「こんなに楽しい時間、久しぶりかも」

雪奈「これからも、こういう飲み会には付き合ってもらからね」

雅也「学生時代は、俺だって幹事やってた時  
もあつたんだからね。前よりかはお酒弱く  
なつたかもしれないけど、お声がかかれば、  
どこへだって行きますよ」

篤志「それぐらいの勢いがあれば大丈夫だ」

雅也「うん」

雪奈「次、どこ行こうね」

雅也「まだ飲めるかな」

篤志「軽くて良いかな」

雅也「俺も。多分、このままだと寝ちやいそ  
う」

篤志「寝んなよ」

雅也「はいはい」

談笑しながら、夜の街に消えていく雅  
也、雪奈、篤志。

おわり